Further Readings on Critics

中村一美「形式批判・小論」『視ることのアレゴリー 1995 : 絵画・彫刻の現在』1995 年、セゾン美術館、Texts & Documents pp. 10–15

那賀裕子+貞彦「発生的絵画の発生」『美術手帖』vol. 31 no. 445、1979 年 2 月、美術出版社、pp. 212–225

たにあらた「芸術における〈制度〉の問題」『みづゑ』812 号、1972 年 9–10 月、美術出版社、pp. 121–126

三木多聞「相変わらずの美術館開設と新しい運営の方向」『美術手帖年鑑'86』1986 年 1 月、美術出版社、pp. 12–14

三木多聞「近現代日本美術の海外への進出」『美術手帖年鑑'87』1987 年 1 月、美術出版社、pp.　12–14

三木多聞「多くの問題をはらんだ日本の絵画輸入」『美術手帖年鑑'88』1988 年 1 月、美術出版社、pp. 12–14

瀬木慎一「絵画における人間の問題」『美術批評』23 号、1953 年 11 月、美術出版社

瀬木慎一「現代美術とオリエント」『藝術新潮』第 7 巻 3 号、1956 年 3 月、新潮社、pp. 197–199

針生一郎＋東野芳明＋中原佑介＋大岡信「座談会 ミシェル・タピエ氏を囲んで」『みづゑ』627 号、1957 年 10 月、美術出版社　　、pp. 23–31

瀬木慎一＋岡本太郎＋ミシェル・タピエ「挑戦のための来日」『藝術新潮』第 9 巻第 5 号、1958 年 5 月、新潮社、pp. 56–67

中原佑介「創造のための批評」『美術批評』41 号、1955 年 5 月、美術出版社、pp. 4–15

中原佑介「新しい絵画世界展」『三彩』107 号、1958 年 10 月、三彩社、pp. 36–37

中原佑介「けちんぼうな芸術家たち ミニマル・アートについて」『美術手帖』vol. 21 no. 310、1969 年 3 月、美術出版社、pp. 67–99

中原佑介「眼に見えない芸術」『美術手帖』vol. 23 no. 342、1971 年 5 月、美術出版社、pp. 42–56

中原佑介「物質から空間へ」『美術手帖』vol. 23 no. 347、1971 年 10 月、美術出版社、pp. 26–46

中原佑介＋東野芳明＋針生一郎「討議 混沌から多様な個別化へ」『美術手帖　臨時増刊号』vol. 15 no. 227、1963 年 10 月、美術出版社、pp.　65–102

峯村敏明「解体と組織化の繰り返し」『みづゑ』921 号、1981 年 12 月、美術出版社、pp. 74–79

早見尭「芸術への自覚」『みづゑ』921 号、1981 年 12 月、美術出版社、pp. 86–91

中嶋泉「「日本戦後美術」とジェンダー」『アンチ・アクション：日本戦後絵画と女性画家』2019 年、ブリュッケ、pp. 29–75

乾由明「第 1 章 戦後美術の転換期」『原色現代日本の美術 第 18 巻 明日の美術』1980 年、小学館、pp. 26–44

三木多聞「第 2 章 芸術とテクノロジー」『原色現代日本の美術 第 18 巻 明日の美術』1980 年、小学館、pp.　61–64

乾由明「第 3 章 ポップ・アートの世界」『原色現代日本の美術 第 18 巻 明日の美術』1980 年、小学館、pp. 81–88

高階秀爾「第 4 章 物質と観念」『原色現代日本の美術 第 18 巻 明日の美術』1980 年、小学館、pp. 105–112

三木多聞「第 6 章 空間と立体造形」『原色現代日本の美術 第 18 巻 明日の美術』1980 年、小学館、pp. 157–164

中原佑介「「人間と物質」展」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 194–204

中井康之「日本万国博覧会―万博芸術再考」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 205–223

峯村敏明「批評の風景―もの派の窓から」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 225–250

乾由明「具体美術の 15 年」『みづゑ』754 号、1967 年 11 月、美術出版社

高橋亨「具体論―愛をこめて」『具体美術の 18 年』1976 年、具体美術の 18 年刊行委員会、p. 9

平野重光＋中原佑介＋峯村敏明＋たにあらた「平面が絵画になるとき」『美術手帖』vol. 29 no. 419、1977 年 4 月、美術出版社、pp. 62–115

峯村敏明「絵画の遍歴」『美術手帖』vol. 30 no. 430、1978 年 2 月、美術出版社、pp. 93–104

早見尭「絵画の理念と絵画の現実」『美術手帖』vol. 30 no. 430、1978 年 2 月、美術出版社、pp. 117–127

ヨシダ・ヨシエ「ハプニングの変貌」『ヨシダ・ヨシエ全仕事』2005 年、芸術書院、pp. 66–77

ヨシダ・ヨシエ「『原爆の図』を背負って」『ヨシダ・ヨシエ全仕事』2005 年、芸術書院、pp. 229–251

ヨシダ・ヨシエ「吉仲太造を通して「戦後」美術を考える」『ヨシダ・ヨシエ全仕事』2005 年、芸術書院、pp. 402–411

峯村敏明「存在にさす移ろいの影 写真の彫刻化/彫刻の写真化」『美術手帖』vol.32 no.462、1980 年 3 月、美術出版社

東野芳明、安斎重男、赤瀬川原平「都市空間の中の身体 : パフォーマンスが表現するもの」『ユリイカ』vol. 16 no. 12、1984 年 9 月、青土社、pp. 146–163

岡﨑乾二郎「アレゴリーについての補論」『視ることのアレゴリー 1995 : 絵画・彫刻の現在』1995 年、セゾン美術館、Texts & Documents pp. 36–40

松浦寿夫「絵画のポリティーク」『美術手帖』vol. 35 no. 511、1983 年 6 月、美術出版社、pp. 8–10

大島徹也「1980 年代の日本の抽象絵画」『美術フォーラム 21』第 30 号 、2014 年 11 月、醍醐書房、pp. 103–108

光田由里「『美術批評』（1952–1957）誌とその時代 :「現代美術」と「現代美術批評」の成立」『Fuji Xerox Art Bulletin』第 2 号、2006 年 12 月、富士ゼロックス株式会社、pp. 4–53

吉原治良「抽象絵画の美」『朝日新聞』1951 年 4 月 17 日、朝日新聞社

吉原治良「抽象絵画の余白」『墨美』21 号、1953 年 2 月、墨美社、pp. 12–15

吉原治良＋須田剋太＋中村真＋大沢雅休＋森田子龍「座談会 書と抽象絵画」『墨美』26 号、1953 年 8 月、墨美社、pp. 236–249

海藤日出男＋植村鷹千代＋徳大寺公英「座談会 ピカソを超えるもの：フランス画壇の新しい動き」『美術手帖』vol. 7 no. 98、1955 年 8 月、美術出版社、pp. 1–8

東野芳明「ひとつのアンフォルメル観：世界・現代美術展手と今井俊満、サム・フランシス展を見て」美術手帖、vol. 9 no. 134、1957 年 12 月、美術出版社、pp. 107–110

東野芳明「狂気とスキャンダル：型破りの世界の新人たち」『藝術新潮』10 巻 11 号、1959 年 11 月、新潮社

東野芳明「ガラクタの反芸術：読売アンデパンダン展から」『読売新聞』1960 年 3 月 2 日、読売新聞社

東野芳明「現代アメリカ美術：ヤンガー・ジェネレーションの冒険」『みづゑ』661 号、1960 年 5 月、美術出版社

東野芳明「ニュー・リアリズム」『藝術新潮』14 巻 4 号 (通巻 160 号)、1963 年 4 月、新潮社

東野芳明「反芸術 是か非か 世話人まえせつ」『日本読書新聞』1964 年 1 月 20 日

宮川淳「変貌の推移・モンタージュ風に」『美術手帖』vol. 15 no. 227、1963 年 10 月増刊号、美術出版社、pp. 49–64

宮川淳「絵画とその影」『眼』第 6 号、1965 年、おぎくぼ画廊

宮川淳「芸術の消滅は可能か」『小原流挿花』1968 年 6 月

宮川淳「記憶と現在：戦後アメリカ美術のプロテスタンティズムについて」『季刊藝術』8 号、1969 年、季刊藝術社、pp. 122–133

宮川淳「引用について」『現代の美術 別巻 現代美術の思想(高階秀爾, 中原佑介編) 』1973年、講談社、pp. 31–50

本江邦夫「イメージはいつも傷ついている」『美術手帖』vol. 36 no. 528、1984 年 7 月、美術出版社、pp. 14–21

本江邦夫「序論」『メタファーとシンボル』1984 年、東京国立近代美術館

菊畑茂久馬「虚妄の刻印」『みづゑ』920 号、1981 年 11 月、美術出版社、pp. 35–41

千葉成夫「序論」『現代美術逸脱史: 1945～1985』1986 年、晶文社

光田由里「芸術・不在・日常 :「反芸術」をめぐる批評言説」『美術批評と戦後美術』2007年、ブリュッケ、pp. 145–168

本江邦夫「作品の復権に向けて」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 251–259

岡崎乾二郎「批評を召喚する : かつて存在した美術批評の回顧にかえて」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 299–322

高島直之「1960 年代 物自体から関係としての物質へ 」『日本近現代美術史事典』2007 年、東京書籍、pp. 100–112

松本透「1980 年代 ポストモダンと芸術」『日本近現代美術史事典』2007 年、東京書籍、pp. 122–133

山田諭「ハイレッド・センターの正体」『ハイレッド・センター 直接行動の軌跡』2013 年、名古屋市美術館/渋谷区立松濤美術館、pp. 186–192

光田由里「ハイレッド・センターと オブジェ/場所/手続/写真 そして穴」『ハイレッド・センター 直接行動の軌跡』2013 年、名古屋市美術館/渋谷区立松濤美術館、pp. 194– 199

磯崎新＋浅田彰「対談 歴史のエアポケットをぬけて ポストモダニズムのゆくえ」『ユリイカ』第 22 巻第 2 号、1990 年 2 月、青土社、pp. 60–89

磯崎新＋柄谷行人＋浅田彰＋岡崎乾二郎「協同討議 芸術の理念と「日本」」『批評空間』第 1 期 10 号、1993 年 6 月、福武書店、pp. 6–39

磯崎新＋柄谷行人＋浅田彰＋岡崎乾二郎「協同討議 モダニズム再考」『批評空間　臨時増刊号　モダニズムのハード・コア: 現代美術批評の地平』1995 年 3 月、太田出版、pp. 8–42

岩田信市「ゼロ次元―発生、活動、パワーの根源―」『現代美術終焉の予兆 ：1970・80 年代の名古屋美術界』1995 年、スーパー企画、pp. 212–219

中西夏之「近くの絵、目前の画布」『季刊へるめす』1985 年 2 号、1985 年

高松次郎・李禹煥「連続対談 1 ：理性・理念・情念・意識・・・・」『美術手帖』vol.25 no. 365、1973 年 3 月号、美術出版社、pp. 194–210

彦坂尚嘉「反復」『反覆: 新興芸術の位相』1974 年、田畑書店、pp. 157–192

篠原資明「90 年代のフェイス／フェイク」『A & C: art & critic No. 5』1990 年 3 月、京都芸術短期大学芸術文化研究所、pp. 10–11

吉岡留美「新しい交流の場へ フジヤマゲイシャ大阪展」『A & C: art & critic No.5』1990 年 3 月、京都芸術短期大学芸術文化研究所、pp. 12–13

秋田由利「美術における終焉と自由：構造主義以降の地平から」『美術手帖』vol. 31 no. 443、1979 年 1 月、美術出版社、pp. 273–287

倉林靖「「ポストモダン」あるいはイメージのアナキズムについて」『美術手帖』vol. 38 no. 564、1986 年 7 月、美術出版社、pp. 149–157

菅章「アンチ・ミメーシスの文脈：川俣正におけるコンテクストの意味」『美術手帖』vol. 45 no. 665、1993 年 2 月、美術出版社、pp. 261–270

篠原資明「ダンディな隙間たち：ダムタイプ「サスペンスとロマンス」展」『A & C: art & critic No.5』1988 年 3 月、京都芸術短期大学芸術文化研究所、p. 14

成相肇「「トリックス・アンド・ヴィジョン展 盗まれた眼」について：最近の調査から」『府中市美術館研究紀要』第 15 号、2011 年 3 月、府中市美術館、pp. 23–47

神谷幸江「1980 年代末から 1990 年代の日本における現代美術表現ー新たなメディアとしてのリレーショナルな表現とその背景」『美術フォーラム 21』第 30 号、2014 年 11 月、醍醐書房、pp. 121–124

植村鷹千代「アヴァンギャルドとレアリズム」『みづゑ』524 号、1949 年 7 月、美術出版社

瀧口修造「前衛絵画の実体」『アトリエ』277 号、1950 年 2 月、アトリエ出版社

瀧口修造「新人について」『アトリエ』282 号、1950 年 7 月、アトリエ出版社

瀧口修造「芸術と実験」『美術批評』5 号、1952 年 5 月、美術出版社

瀧口修造「アブストラクト・エージ」『藝術新潮』3 巻 5 号、1952 年 5 月、新潮社

瀧口修造「抽象と幻想」『美術手帖』vol. 6 no. 78、1954 年 2 月、美術出版社

瀧口修造「伝統の問題」『みづゑ』608 号、1956 年 3 月、美術出版社

瀧口修造「越えよ表現の危機 読売アンデパンダン展をみて」『読売新聞』1957 年 3 月 1 日、読売新聞社

瀧口修造「破られる既成技法 第 11 回読売アンデパンダン展」『読売新聞』1959 年 3 月 5 日、読売新聞社

瀧口修造「作品の危機と責任 読売アンデパンダン展から」『読売新聞』1962 年 3 月 16 日、読売新聞社

今泉篤男「近代絵画の批評」『美術批評』8 号、1952 年 8 月、美術出版社

ミシェル・タピエ＋富永惣一＋瀧口修造＋今井俊満『アンフォルメルとは何か』1957 年、座右宝刊行会、pp. 1–49

今泉篤男＋富永惣一＋土方定一＋岡本謙次郎「アンフォルメル本もの贋もの」『藝術新潮』8 巻 1 号、1957 年 1 月、新潮社、pp. 89–102

武井昭夫「政治のアヴァンギャルドと芸術のアヴァンギャルド」『美術批評』51 号、1956 年 3 月、美術出版社

富永惣一「パリ画壇の断層」『読売新聞』1956 年 10 月 8・9 日、読売新聞社

富永惣一「カレル・アペル 芸術的断言」『みづゑ』616 号、1956 年 11 月、美術出版社

富永惣一「今日の空間」『みづゑ』617 号、1956 年 12 月、美術出版社、pp. 4–10

富永惣一「造形の問題」『みづゑ』618 号、1957 年 1 月、美術出版社、pp. 48–55

椹木野衣「シミュレーション・アート：非整数次元の芸術」『美術手帖』vol. 41 no. 603、1989 年 1 月、美術出版社、pp. 16–24

椹木野衣「よみがえる「戦後美術」 しかしこの車はもと来た方向に走っているではないか」『日本美術全集 19 巻 拡張する戦後美術』2015 年、小学館、pp. 170–189

椹木野衣「第 1 章: 閉じられた「円環の彼方」は？」『日本・現代・美術』1998、新潮社、pp. 8–26

山口勝弘「第 7 章 映像の芸術―写真とヴィデオ」『原色現代日本の美術 第 18 巻 明日の美術』1980 年、小学館、pp. 177–186

尾崎信一郎「アンフォルメル」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 123–144

椹木野衣「ネオ・ポップの展開」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 261–279

水沢勉「美術館の条件―戦後日本の「近代美術館」の出発から」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 281–298

尾崎信一郎「1950 年代 リアリズムとアヴァンギャルド」『日本近現代美術史事典』2007 年、東京書籍、pp. 86–99

椹木野衣「美術 祝祭、狂乱、共闘、流転」『1968 ［1］ 文化 四方田犬彦編』2018 年、筑摩書房、pp. 31–50

山崎博「光をとらえ定着させる」『美術手帖 増刊号』vol. 33 no. 489、1981 年 11 月、美術出版社、pp. 212–215

瓜生良介「第四章～第五章」『小劇場運動全史: 記録・発見の会』1983 年、造型社、pp. 70–109

加藤瑞穂「日本におけるアンフォルメルの受容」『草月とその時代 1945–1970 芦屋市立美術博物館、千葉市美術館編』1998 年、草月とその時代展実行委員会、pp. 88–98

岡田隆彦「虚像が行為を促すために」『危機の結晶: 現代美術覚え書』イザラ書房、pp. 261–302

岡田隆彦「新しい空間認識をめぐって」『危機の結晶: 現代美術覚え書』イザラ書房、pp. 343–368

中村宏「フランケンシュタイン・テーゼ」『みづゑ』794 号、1971 年 3 月、美術出版社、pp. 32–34

秋山邦晴「滝口修造氏と実験工房のこと (信号柱・場所と公式)」『現代詩手帖　臨時増刊』17 巻 11 号、1974 年 10 月　　、思潮社、pp. 204–208

建畠晢「”モルフィスム”の復活」『視ることのアレゴリー 1995：絵画・彫刻の現在』1995 年、セゾン美術館、pp. 10–16

東谷隆司「ART/DOMESTIC of the Time」『時代の体温 ART/ADOMESTIC Temperature of the Time』1999 年、世田谷美術館、pp. 33–62

建畠晢「彫刻の失敗」『A&C No.5』1988 年 3 月、京都芸術短期大学芸術文化研究所、pp. 1–3、

安部公房「シュルレアリスム批判」『みづゑ』429 号、1949 年 8 月、美術出版社　　、pp. 39–43

岡本太郎「ヨーロッパの戦後派」『美術批評』21 号、1953 年 9 月、美術出版社

岡本太郎＋瀬木慎一＋針生一郎ほか「アヴァンギャルドとリアリズム 内部と外部の世界の統一 その方法論をめぐって」『美術批評』38 号、1955 年 2 月、美術出版社

針生一郎「物質と人間」『みづゑ』618 号、1957 年 1 月、美術出版社、pp. 43–47

針生一郎「伝統と前衛」『みづゑ』624 号、1957 年 7 月、美術出版社

針生一郎「危機のなかの前衛群」『美術手帖』vol. 13 no. 187、1961 年、美術出版社

針生一郎「前衛芸術に疲れました」『藝術新潮』第 13 巻 第 8 号、1962 年 8 月、新潮社

針生一郎＋東野芳明＋江原順「反絵画・反彫刻・反批評 二つのアンデパンダン展の問題点をめぐって」『みづゑ』660 号、1960 年 4 月、美術出版社

藤枝晃雄「新しいものの終わり―現代美術の状況」『美術手帖』vol.21 no. 307、1969 年 1 月、美術出版社、pp. 54–70

藤枝晃雄「観念のロマンティシズム―物質の消滅」『美術手帖』vol.21 no. 315、1969 年 7 月、美術出版社、pp. 78–113

藤枝晃雄「視覚による視覚の批判」『美術手帖』vol.21 no. 310、1969 年 10 月、美術出版社

藤枝晃雄「新しい表現への志向」『美術手帖』vol.22 no. 329、1970 年 7 月、美術出版社

藤枝晃雄「二つの抽象」『現代の美術 構成する抽象』1971 年、講談社、pp. 106–127

藤枝晃雄「最後の絵」『季刊藝術』第 7 巻第 3 号第 26 号、1973 年 7 月、季刊藝術社

建畠晢「回帰するイメージ」『美術手帖』vol. 36 no. 528、1984 年 7 月、美術出版社、pp. 48–54

建畠晢「あいまいな彫刻」『美術手帖』vol. 38 no. 563、1986 年 6 月、美術出版社、pp. 42–48

藤枝晃雄「第 5 章 新しい平面芸術」『原色現代日本の美術 第 18 巻 明日の美術』1980 年、小学館、pp. 129–140

針生一郎「いわゆる「ルポルタージュ絵画」」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 95–102

北澤憲昭「伝統論争—60 年代アヴァンギャルドへの隘路」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 103–122

富井玲子「言説としての「模型千円札事件」—原資料による再構成」『美術批評と戦後美術』2007 年、ブリュッケ、pp. 169–193

藤枝晃雄「1970 年代 〈反芸術〉の芸術化」『日本近現代美術史事典』2007 年、東京書籍、pp. 113–121

建畠哲「生成するタブロー 具体の 1950 年代」『絵画の嵐・1950 年代 : アンフォルメル/具体美術/コブラ』1985 年、国立国際美術館、pp. 14–19

黒田雷児「異説・美術運動としての九州派 共生する創造者たち」『九州派展: 反芸術プロジェクト』1988 年、福岡市美術館、pp. 14–23

山口洋三「九州派 結成と展開を人物交流とインタビューの言葉からさぐる」『九州派大全: 戦後の福岡で産声を上げた、奇跡の前衛美術集団』2015 年、福岡市文化芸術振興財団、pp. 117–131

藤枝晃雄＋李禹煥＋山田正亮「絵画自身へ向かって」『美術手帖』vol.30 no. 430、1978 年 2 月、美術出版社、pp. 46–84

李禹煥「存在と無を超えて—関根伸夫論」『三彩』245 号、1969 年 6 月、三彩社

李禹煥「世界と構造—対象と瓦解」『デザイン批評』第 9 号、1969 年

李禹煥「出会いを求めて」『美術手帖』vol. 22 no. 324、1970 年 2 月、美術出版社、pp. 14–23

藤枝晃雄「芸術のない日々」『ユリイカ』第 22 巻第 2 号、1990 年 2 月、青土社、pp. 135–141

藤枝晃雄「メタ理論を遁れて」『芸術/批評』0 号、2003 年、東信堂、pp. 3–22

中平卓馬「記録という幻影」『なぜ、植物図鑑か』1973 年、晶文社、pp. 37–64

中平卓馬「写真、1 日限りのアクチュアリティ」『なぜ、植物図鑑か』1973 年、晶文社、pp. 96–103

木村恒久「記録の仮象性」『季刊フィルム』No.12、1972 年、フィルムアート社、pp. 64–71

石子順造「官許のデザインと芸術の陥穽ー赤瀬川原平の「模型千円札」」『表現における近代の呪縛』1970 年、川島書店、pp. 138–157

藤枝晃雄・早見堯・峯村敏明・たにあらた「今日の芸術表現とは」『みずゑ』893 号、1979 年 8 月、美術出版社、pp. 92–107

岡本太郎『アヴァンギャルド藝術』1950 年、美術出版社

針生一郎『戦後美術盛衰史』1979 年、東京書籍

椹木野衣『後美術論』2015 年、美術出版社

椹木野衣『震美術論』2017 年、美術出版社

赤瀬川原平『東京ミキサー計画: ハイレッド・センター直接行動の記録』1984 年、ＰＡＲＣＯ出版

赤瀬川原平『いまやアクションあるのみ! 「読売アンデパンダン」という現象』1985 年、筑摩書房

高松次郎『世界拡大計画』2003 年、水声社

高松次郎『不在への問い』2003 年、水声社

松浦寿夫＋岡崎乾二郎『絵画の準備を』2002 年、セゾンアートプログラム